

日葉酢媛命御陵の資料について

石 田 茂 輔

一、御陵の沿革

垂仁天皇の皇后日葉酢媛命の御陵は、日本書紀に武内宿禰の献策で殉死にかえて初めて御陵に埴輪をたてたと云う記事があり、又新撰姓氏録には、石作連が石棺を作つて献じたと云う記事⁽²⁾がある御陵であるが、日本書紀や延喜諸陵寮式にはその所在地を記載していない。しかし古事記には、「此后者、葬狭木之寺間陵也、」と記載され、嘉承元年（一一〇六）の菅家御伝記には「日葉酢媛命狭城墓⁽³⁾ 今狭城盾列池前陵是也」と記されているので、平安中期頃までその所在が判然としていたことが察せられる。その後何時の頃にか所伝を失つて、江戸時代には所在不明になつていたが、明治八年に教部大録山之内時習等の実検勘註によつて教部省で現在の御陵を決定した。当所は元祿十年幕府が歴代の御陵を探索した際に、地元では御陵山と呼び神功皇后陵と伝えていたので、以後同皇后陵として幕府の保護を受けることになつた。神功皇后陵は文久三年に当所の北方約四丁の所にある現在の神功皇后陵に改定になつたが、当所はそれまでの間ずつと神功皇后陵とされていたので、江戸時代の状態については比較

的資料が残っている。

明治八年日葉酢媛命御陵に決定後は、明治十二年に埴丘の実測図が作られ、大正五年の発掘復旧工事の際には、諸陵寮で主体部について復旧工事の前後の各実測図の作製や、出土遺物の写真撮影・復原・記録採集等を行なつたので、当御陵の資料は大いに充実した。ところがこれらの資料は、大正十二年九月の関東大震災でその大半を焼失してしまつた。そこで諸陵寮では、大正五年当時の現場を知つている和田千吉氏を主としてこの焼失資料の復旧につとめたが、その一部分しか集め得なかつた。ところが戦後になつて、梅原末治博士から同博士の手許にある日葉酢媛命御陵の資料を提供するから、これを完成して書陵部に記録として残して置いてはどうかと云う意味の御好意ある申し出をうけた。同博士は関東大震災の前に、当時諸陵寮に居られた藤田亮策氏と共に諸陵寮倉庫にあつた出土品類を調査整理されたことがあつた関係で、震災で焼失した前記図面の青写真や、出土品の写真を持つて居られたのである。梅原博士のこの申し出によつて、書陵部では昭和三十四年六月に、これら資料について博士に講演をお願いし、引続いて資料の提供を受けて、その

複写を作製した。

その後梅原博士は、昭和三十五年九月近畿日本叢書「大和の古文化」中の「古式古墳観」と題する論文に、古式古墳の一例として、この御陵の出土遺物の一部の写真と、博士の構想による御陵主体部の復原図とを掲載されて、この御陵の特殊な内部構造についての見解を述べられた。そうして、この様な複雑な内部構造をもつた大形古式古墳が、畿内の中心地区では、所謂原始的な内部構造をもつ古式古墳と相並んで同時に行なわれたとし、且つこの御陵は副葬品では佐味田宝塚古墳に年代の上で先行するとせられた。これに対して、この御陵は佐味田宝塚古墳よりももつと年代が下降すると云う意見⁴がその後出されている。ところがこの御陵の資料は断片的にしか一般には知られていないので、書陵部に一応資料を集まつたこの際これら全部の資料をまとめ、資料の示すこの御陵について紹介し一般研究の資料に供したいと思う。

二、資料の概要

現在書陵部に蒐集されている日葉酢媛命御陵に関する考古資料は、次にしるす絵図・実測図・写真・出土遺物模造等であつて、出土遺物そのものは修補の際に石室内へ埋戻されている。

絵 図

1 元祿の御陵図

原絵図は、元祿十年に奈良奉行内田伝左衛門が幕府の命によつて調査

させ、絵師三郎左衛門秀行に描かせ幕府に差し出したものであるが、現在集められているものは、山陵帖・伴信友編諸陵周垣成就記・元祿御陵図説・大和国山陵図考などと称されるものである。絵図中に神功皇后陵としてあるものが当御陵である。図は平面の絵図で、墳丘の根廻り及び後円部の頂上に竹矢来が廻らされ、頂上の竹矢来中には三箇の矩形の石があつて「石棺九尺、横三尺五寸」と註記する。又後円部の背面中腹には石燈籠一基がある。

2 享保の御陵絵図

原絵図は、享保三四年頃京都及び奈良の奉行所与力に命じ作らせたものであるが、集められているものは、享保御陵記附図・享保年間山陵誌などと称せられるものである。この絵図も神功皇后陵が当御陵に当る。図は東を正面にした鳥瞰絵図で、後円部の頂上は円形の平地になつて居り、此所から後方の外まで一筋の道が通じている。後円部の頂上と、この道の途中とに小さな建物が一軒ずつある。絵図の註記中には墳丘の状況を示す次の記載がある。

山之頂ニ凡五十間廻程之間平地、先年垣仰付候跡へ山陵村々毎年正月十日ニ四十八間廻リメ繩二筋ツ、引候 内御石棺被相見候 棟折候大石老ツ平石三ツ有之 平地形之内ニ白き海石之小石多く有之 所之氏神ニ祭り山之上リ道半腹に石燈籠有之 右小さき石を取候得者祟申候旨 山林山ニ而雜木生茂り有之候得共伐採不申候由、惣山形南北長く惣廻池ニ而土砂留之壺多く伏せ有之

3 文化の御陵絵図

原絵図は「文化度陵調書留写」⁽⁵⁾によれば、文化三年から五年にかけて京都東町奉行森川越前守俊尹が、与力石嶋俊啓・山田高邦その他同心等に命じて調査させ、画工山本法橋探淵に描かせた三巻のものである。四部作り一部を朝廷に献じ、他は幕府・京都所司代・町奉行所に配置したと云う。集められているものは数種の写しであるが、掛紙のあるものとならないものに大別される。この絵図も神功皇后陵とあるものが当陵であることは前二者と同様である。図は大体享保の御陵絵図を踏襲しているが、相異点は享保の図では平坦地であつた後円部の頂上が、この図ではその中央に樹林が出来ていることである。掛紙のあるものでは、掛紙でその樹林の中央に石を描いて「石三尺 九尺」と注し、更に後円部にある上り道の両側に石燈籠数基を註している。

4 狭木寺間陵実検勘註附図

教部省調査御陵記に収められた明治七年五月に教部大録山之内時習等の手になる当御陵実検勘註の附録絵図で、平面絵図・墳丘の後方よりの側面絵図・後円部の埋葬施設露出状況の絵図の三枚がある。この図によれば墳丘の後方斜面には、当時は鳥居・石段・石垣・石燈籠などが設けられて居り、後円部頂上には、三枚の板石と屋根形の石が露出している。

5 明治十二年の山陵図

原絵図は明治十二年に御陵墓掛よりの達しにより当時管轄していた堺県で調製した同年十月調査の図で、鳥瞰図と平面図からなり、平面図は

縮尺千二百分の一に描かれている。現在あるものは奈良県庁蔵本の写しである。この図には陵前に鳥居・玉垣で区劃した御拝所が加わり、後円部は前記4の図にあつた燈籠・祠がなくなっているが、参道の石段と墳頂の石室の露出はそのまゝになつている。

実測 図

1 垂仁天皇皇后狭木之寺間陵之図〔図版四〕

縮尺五百分の一。帝室林野局が大正十五年に測量、昭和三年に製図した御陵の地形図である。成務天皇陵及び称徳天皇陵と合せて三陵が一枚に調製されている。

2 狭木之寺間陵御所在復旧工事実測図〔其一図〕〔図版一〕

縮尺五十分の一。原図は諸陵寮で調製したものであるが、関東大震災で焼失した。現在の図は、梅原博士の手許に残つたこの図の青写真から複製したもの。当陵後円部頂上の埋葬施設に関する復旧工事着手直後の状況実測図で、平面・断面の両図が記され簡単な所見の記入があり、寸法は尺で表示されている。当陵の石室の構造を知る重要な図である。

3 狭木之寺間陵御所在復旧工事出来実測図〔其二図〕〔図版二〕

縮尺五十分の一。現在の図は軸に仕立てられているが、これが原図か震災後の複製図かは不明。前記2の図とは標題が異つているので、それぞれに其一・其二があつたことも考えられるが、梅原博士の手許の青写真は2の図とこの図の二枚だけであることから見れば、2の図と当図の二枚一組に調製されたように考えられる。この図は当陵の埋葬施設復

旧工事完了後の状況を示す平面と断面の図で、寸法は尺で表示し、前記2の図と共に当陵の石室の構造がわかる貴重な図である。

4 和田千吉氏構想狭木之寺間陵御所在復原図〔図版三の1〕

縮尺約五十分の一。諸陵寮で当御陵の資料を整理して居られた和田氏の構想になる後円部頂上埋葬施設の未完成復原図である。同氏は当陵復旧工事の現場を見られているとのことであるから、復原図とは云え記録的価値もあるものと考えられる。

図には石室の封土を二段築の方丘とし、封土の裾には護石の如く石垣をめぐらし、石室の前後の短側面は前後共に地表に顕れるようになっていいる。石室直上の封土上にはきぬがさ埴輪九個と埴輪の家とを置き、段築封土の各段裾の石垣の外に接して埴輪円筒列を各々配し、その内側埴輪列には蓋付の壺形のもの一個交えている。

5 梅原末治博士構想狭木之寺間陵御所在復原図〔図版三の2〕

縮尺三十分の一、昭和三十四年に梅原博士から資料の提供を受けた際に頂いたもの。同博士が翌年近畿日本叢書「大和の古文化」に発表された復原図と同じ構図である。前記4の和田氏復原図との大きな相違は、4の図の石室封土頂上の埴輪のきぬがさや家の代りに、屋根形の石を据えた点と、封土の方丘が4の図では二段々築であるのを一段築にしたことである。その他封土の方丘裾の石垣と埴輪列が4の図では石室の北側及び南側に面する部分だけ欠けているのに、この図では全面にあることや、石室の天井の高さ・南及び北の側壁の構造など可成りの差異が認め

られる。

6 埴輪楯の復原図〔第五図〕

原寸大。美濃紙十三枚を貼り継いだ縦一二七糎・横一〇二糎の紙に毛筆で描いたもので、和田千吉氏の作と云われている。縁に直弧文のある埴輪楯の正面図だけである。掲載図はこの図をトレースしたもの。

7 埴輪きぬがさの復原図〔第四図〕

縮尺四分の一。和田千吉調査と墨書のある埴輪きぬがさの復原図の写真をもとにし、雑誌「考古学」一卷四号に発表された和田氏の復原図を参考にして当部で製作したもの。平面図・側面図の二枚がある。

写真資料

1 副葬品の写真

キヤビネ判。稍ピントのぼけた写真であるが、副葬品の実物写真としては唯一のものである。諸陵寮が撮影したものとのことであるが、原板・印画共になくなり、現在のものは梅原博士の手許に残った印画を複写した次の九枚である。

(1) 流雲文縁変形方格規矩四神鏡背面、(2) 同鏡表面、(3) 唐草文縁変形方格規矩四神鏡背面、(4) 同鏡表面、(5) 変形直弧文縁内行花文鏡背面、(6) 同鏡表面、(7) 石製摺臼・椅子形石製品・石釧・車輪石・平縁式四獣鏡・鍬形石等一括、(8) 石製高坏残欠・車輪石残欠・鍬形石及び同残欠・貝殻形石製品など計七点、(9) 石製合子蓋残欠・管玉・石製斧・石製刀子残欠・琴柱形石製品残欠・石製高坏残欠・原形不明石製品残欠等計十四点。

このうち(5)及び(7)の二枚は近畿日本叢書「大和の古文化」に梅原博士が掲載された。

2 埴輪楯の写真〔図版九〕

四ツ切判。破片十九片を石膏で接合した楯正面部へ粘土で円筒部を継ぎ足した埴輪楯の写真で、正面・左側面・右側面の三枚がある。復原直後に撮影したものである。印画のみで原板は不明。正面の写真は後藤守一博士の「埴輪と御神玉」(考古学二(卷四号所収))に掲載されている。

3 埴輪きぬがさ復原図の写真

四ツ切判。「和田千吉調査」の墨書が右隅にある平面・側面・断面を重ねて描いた復原図を撮影したもの。梅原博士の話では原図は畳二畳敷大の実大図で、同博士が和田氏に頼んで撮影してもらった由である。この図面の複写原板は三枚あつて、そのうち二枚は梅原博士所蔵写真の複写であるが、同博士所蔵品の一枚には図の一部に墨入れをして見やすくしてある。これは博士が写真に墨入れせられたらしい。本復原図には直弧文の記入が全くない。

拓本資料

仿製鏡三面の鏡背の湿拓三枚があつて、和田千吉氏が手拓したものと云われている。この鏡の拓本は当時幾枚も作られたらしく、諸所に分蔵されていて、「日本考古図録大成」その他の図書に一枚ずつではあるが一応全部のものが収録されている。

石膏模造

仿製鏡三面、鍬形石三個、車輪石三個、石釧一個、管玉一個、石製合子蓋残欠一個、石製高坏二個、石製摺臼一個、石製刀子残欠三個、琴柱形石製品残欠二個、椅子形石製品一個、貝殻形石製品一個、原形不明石製品破片二個がそれぞれ二組ずつ造られているが、そのうち一組は、既に破損しているものがある。この模造は、出土品を御陵に戻す前に寒天型にとつて複製したとのことであるが、実物の写真に見られる小形の四獣鏡は模造がないので、外にも模造品を造らなかつたものがあるかとも疑われる。模造品と実物の写真を比較して見ると、実物写真で破片又は小破欠損のものが、模造品では接合又は補足復原してあるものが認められる。

三、御陵の現状と主体部の構造

この日葉酢媛命の御陵は、現在奈良市山陵町御陵前の、近鉄西大寺駅東北約八百米の所にある。当陵は西側は成務天皇陵に接し、北にはまえば塚があり、東側には瓢箪山・円塚などがあつて、これら諸墳と共に、所謂佐紀古墳群と称されるもののなかの一つである。

墳丘は南面の前方後円墳で、奈良盆地の北に連なる山丘の突出部に、その自然の山丘を利用して築造されたものである。現状は三段築成の様に見えるが明治十二年の図では前方部は三段後円部は四段の段丘に築成された様に記されている。その墳丘をめぐる濠は、墳丘につながる小土手によつて三区に区切られた水位の高低のあるものである。墳丘の全長

約二〇六米、前方部幅約八九米、後円部径一三〇米、前方部高さ二・三米、後円部高さ四段目段丘頂上まで一八米、同石葺円丘頂上まで二・三米の法量をもち、後円部は前方部より五・七米高く、前方後円墳としては古い形態を示している。墳丘の表面は大むね腐葉土に覆われて、草木類が繁茂しているが、斜面の所々には葺石の残存するのが認められる。また後円部の後方中腹には、江戸時代に設けられた参道の石垣などの痕跡が残っている。

享保の御陵図によれば、「惣廻池ニ而土砂留之壺多く伏せ有之」とあって、多くの埴輪が存在したことが察せられが、調査不十分で、現在のところ埴輪は墳頂部で一部が確認されているに過ぎない。即ち前方部頂上では、平坦部前面の東側に家形埴輪と思われる矩形の埴輪基部が残存し、平坦部側面の稍内側には、南北に走る埴輪列の一部と思われる少数の埴輪円筒が認められる。後円部では、截頭円錐形を呈する四段目段丘の頂上である直径約三二〇三五米の円形平坦部に、円形に埴輪列が残存し、この埴輪列は景行天皇陵後円部頂上の埴輪列と同様に、平坦部縁稜線より約一米内側を外周として円形に列んでいる。この埴輪列の各埴輪は厚さ平均一・五厘、残留部分直径三五厘〇三九厘の大小ある円筒埴輪で、六厘から一五厘の間隙を置いて列んでいる。

この埴輪円筒に囲まれた円形部中央に、石室を覆う円丘が存する。これは直径約二〇米、高さ約三米の円丘で、全面に拳大の玉石を葺き、その中央の石室直上の部分はこれをコンクリートで固めており、大正六年

の修補によつて作られたものである。この部分の修補以前の状況について、以下前述の資料により記すことにする。

1 石室の封土

現在の玉石葺き円丘は、狭木之寺間陵御所在復旧工事実測図〔図版二〕によれば、当時土の円丘で、その上部は図に「某時代ニ盛土ヲナシタル土壤」と註記された表層が覆い、その下には中央に屋根形石の据えられた「不純粘土ノ封土」と註記のある層があつて、石室の天井を覆っている。

江戸時代及び明治十二年の絵図には、この円丘部には石室の石が露出しているので、前記表層は明治十二年以後に盛土されたものであり、下層の「不純粘土ノ封土」は江戸時代以来の表層である。

この「不純粘土ノ封土」は中央部で、石室天井石より約八〇厘の厚さがあり、中央部の屋根形石直下の南寄に、石室の側壁と同様な扁平な割石を小口積にしたものが一部認められている。この割石積は上部しか判明していないが、もし石室天井石まで達するものとすれば、奈良県新山や京都妙見山などの古墳に見られる様な、石室上に更に二重の石室を築いたものが考えられるが、次に記す封土の状況からその可能性は殆んどない。

又この「不純粘土ノ封土」の上部には、南方の断面で葺石のような礫石が点々と弧状に遺留することが図に示されている。これは後に述べる石室直上から七・八個の埴輪きぬがさが発見されたことと合せて、この

封土の上部が、造営当時の封土表面であつたことを思わせる。しかし、この礫石遺留層が北方の断面には全く認められないことと、この層の高さが石室側壁の大磐石の高さと殆ど一致すること、後述する石室天井石の状況など、「不純粘土ノ封土」をその儘造営当時の封土とすることに多くの難点を有している。

石室の封土の原形については、和田氏の復原図〔図版三の1〕では二段築方丘に、梅原博士の復原図〔図版三の2〕では截頭方錐形に復原されているが、前記の礫石遺留層の形態からは、現在の玉石葺の円丘のように考えることも可能である。

2 矩形石垣及び矩形埴輪列

実測図〔図版一〕によると、円丘の東部の裾近くに南北に連なる石垣と、これの東側に接して平行する埴輪列がある。この石垣は扁平な割石を小口積にして高さ約七〇糎、奥行約三三糎に作り、この西側に裏込として奥行約四〇糎の粘土壁を密着させたもので、図には石墨壁と表示されている。石垣のひろがりについては、東西一五・七五米、南北一六・五一米の矩形に石室を囲むと想定されているが、想定の根拠と思われるような遺構は図に表われていない。しかしその大きさは、東側の石垣と石室中心線から機械的に割出したものではないので、他の発掘部分に何等からの形跡を認めて想定したように察せられる。

この石垣の外側に接する埴輪列は、い・ろ・は・に・ほの五個の円筒と、この円筒の外側に接するへの円筒があり、ろ・は・にの三個は直径約三三糎、い・ほはそれぞれ直径五〇糎、四〇糎と大きく、へは直径約

五五糎と更に大きく、これらは一八糎から二二糎位の間隔を置いて列んでいる。

この石垣と埴輪の基底部と、石室の北側底石の下面は殆んど同一平面上にあつて、それは実測図〔図版二〕によれば現在の玉石葺きの円丘の頂上から約三・七米下方に当り、これは又現在の円丘のある円形平坦部の地表下約四〇糎に相当する。従つて、現存する円形の埴輪列もその埋没部分を考慮に入れると、恐らく矩形埴輪列など同一平面に設置されたものと推定される。

このような石室と、これを囲む方形石垣及びそれに伴う埴輪列の関係は、岡山県金蔵山⁽⁸⁾・奈良県室大墓⁽⁹⁾・大阪府黒姫山⁽¹⁰⁾その他の諸墳にみられる方形石垣又は石敷とそれに伴う埴輪列や、桜井茶臼山古墳⁽¹¹⁾の方形石敷とこれに伴う方形壺列の石室との関係に平面上は殆んど同じである。しかしこれを立体的に比較するときは、当陵ではこれが石室の基底と同一平面に設けられて基壇又は護石の役をするのに対し、前記の諸墳では、これが石室上部封土の上にあつて、石室の位置を区劃する単な標識にか過ぎなくなつていと云う大きな相違が認められる。

このことは当陵では後円部段丘頂上に石室を構築して後に封土を盛上げたのに対し、前記諸墳では段丘頂上を掘込んで石室を構築し、掘込んだ土を埋戻して封土としたと云う石室構築法の違いにもよると思われるが、当陵の矩形石垣が実効をもつのに前記諸墳の方形石敷が余り実効を伴ふことは、当陵が前記諸墳に先行することを思わせる。

3 石室の構造

長軸が真北より稍東に振れた堅穴式石室で内法南北八・五五米を計り、堅穴式石室の長さとしては静岡県松林山古墳の七・九米を凌駕し、東西の幅は南端一・〇九米、北端一・〇九米でこれも稍広く長大な石室と云える。ところがこの石室は、東西の両側壁は普通の堅穴式石室と同様な扁平な割石を小口積にしたものであるが、南北の両側壁は共に大きな一枚石の上半中央に孔をあけたものを以つて充てると云う著しく異形の構造をとり、その上この一枚石の下には後述するように厚い切石の底石を敷くと云う入念な構造のものである。

石室長側壁 石室の東西両側の側壁は堅穴式石室に普通の扁平な割石を小口積としたものであるが、普通のものとは異なる点は、最上部の天井石との接続部分に下部の割石とは別の、厚さ約八糎、幅約三五糎の切石を猫石状に置くことである。側壁の高さは中央部一・四八米、南端一・一〇米、北端一・二八米を計り、両端の短側壁の板石が外方に傾斜して両端が外に崩れ出たためか、両端が中央より低くなっている。

石室短側壁有孔板石 南北両側の短側壁は前述の様にいずれも有孔の一枚石で出来ており、共に外方に傾斜し倒れかかっている。南側の板石は高さ二・一三米、幅二・〇三米、厚さ〇・二四二米の横長矩形の切石であり、北側の板石は高さ二・三六九米、幅一・七四二米、厚さ〇・三〇三米で南側より幅の狭い縦長矩形の切石である。この二枚の板石はいずれも外面の左右両側の角を幅一〇糎、奥行五糎に欠き取つて組手の

如く作られており、此所に副室の側壁又はこの石のひかえの石がかみ合わされていたように思われるが、それらしき石材や痕跡は見当らない。しかしこのしやくり面は板石外方に何等かの施設の存在を考へる必要があると思われる。

南北の両板石にはその中心線上の上半部中央に横長の矩形の孔を上下二つずつあける。この孔は南の石は上孔横一六糎、縦八糎、下孔横一六糎、縦六糎、北の石は上孔下孔共に横一一糎、縦八糎で、四孔いずれもその下辺が石室内側に向いて下方に傾斜し内側が広く作られている。この四孔の板石下端よりの高さは南の石では上孔中心まで一・五三〇米、下孔中心まで一・三三三米、北の石では上孔中心まで一・六七二米、下孔中心まで一・四六〇米で南北ばらばらの位置にある。

このように石室の両端に有孔の大板石が立つている例は極めて少なく、大阪府松岳山古墳にその例があるのが報告されているに過ぎない。⁽¹²⁾松岳山古墳は小林行雄博士の調査報告によれば、先行形式の長持形石棺を納めた堅穴式石室で、その短辺の両方に当陵のものとは形状の異つた有孔の大板石があり、それは石室の側壁とは認めていない。然しこの大板石の外に短辺の側壁も確認されて居らず、両板石間の距離は、約八・五米で当陵の両大板石の間隔に近く、当陵の両大板石と同一に見てよい様に思われる。

この大板石の孔の機能については、当陵のものは石室内に供物を入れる穴、又は内部ののぞき孔、松岳山古墳のものは石棺を釣下げるろくろ

取り付け孔等の説が出されているが、いずれも不合理の点があることを認め定説がない。当陵の場合石室が地上で構築されたと見られる点から、石室構築過程に於ける何等かの必要で作られた孔のようにも考えられる。

石室底石　石室の南北両端の側壁大板石の下には、厚い板石の底石が敷かれている。南の底石は幅二・六八米、厚さ三〇・三三糎、見着けの上方は大きく面取をし、大板石との仕口はその厚さの幅に約六糎の深さに欠き込んだ溝がつけてある。北の底石は幅二・〇六米、厚さ二四・二糎、側壁大板石との仕口は南と同様に欠き込んで溝が彫られている。南と北の底石表面のレベルは北が南より一〇・六糎低くなっている。このレベル差は底石の不等沈下とも考えられるが、桜井茶臼山・岡山県金蔵山などの古墳の石室構造をはじめ各種石棺の構造から推しても、古墳埋葬施設の一般的傾向であつて、当初から排水施設として計画的にレベル差を設けたものと認めてよいと思う。

この底石は和田氏復原図〔図版三の1〕の如く南北両端のみのものか、梅原博士復原図〔図版三の2〕の如く石室全面に敷かれたものか、実測図からは不明である。

石室天井　実測図〔図版一〕には石室の北端から南へ順に①②③④⑤の五枚の天井石が、割板石小口積長側壁の猫石状切石の上に構築されている。各天井石は厚さ三〇～三三糎、東西の長さ二・三四八米～二・六一八米、南北の奥行一・二七二米～一・九六九米の大小ある矩形又は梯

形の切石で、その石室内に面する下面は深さ約五糎に内割りが施してある。このうち北端の①及び南側の⑤④の三枚には、奈良県室大墓北側石室の天井石に見られるものと同じ趣向の両短側に二個ずつ列んだ繩掛突起が作り出されている。

各天井石はそれぞれ不等沈下を生じており、各石の間には相当の間隙が出来ているので、築造当初よりは相当移動していることを思わせる。比較的水平を保つて移動が少いと見られる④の石について見ても、南側壁の大板石を底石の仕口の彫込に直立させて見ると、④と大板石との間隙は一・二三米になり、この間隙に幅一・三六米の⑤天井石は納まらない。従つて④の石は南へ最低一三糎は移動している訳である。地中でこれだけの水平移動が自然に生じることが少々疑問であり、これは過去にこの天井石を揚げ動かせたことがあると見てよいと思う。それは又この天井石を覆う「不純粘土ノ封土」が造営当初の儘でないことを意味する。

石室内部　実測図〔図版一〕では石室内部の大半は調査不能で、手がつけられておらず詳細は知るすべがないが、石室内の南北両端近くと中央に石積の壁が存することを示している。

南北の両端に設けられた石積壁は、共に各々の有孔大板石の内面より三五糎内側で大板石を受ける底石上に築かれている。扁平な割石を小口積にして高さ九〇糎、奥行三〇糎に作られており、南側の壁は上端が一部破損している。この石積壁と外側の有孔大板石との空間は、双方共に粘土が詰まっているが、北側のものは純粘土、南側のものは粘土中に鏡

二面を蔵していたと云う相違がある。

石室中央に設けられた石積壁は、両端の石積壁と同様扁平な割石を小口積としたものであるが、稍南方に傾斜して両端のものと同趣きを異にし、実測図〔図版一〕に「過去ノ時代ニ於テ閉塞ナシタルモノト思ハル石壁」の註記があつて、造営当初のものではなさそうである。これは前述の天井石の移動と共に、何時の時代かに石室内がいじられたことを考えさせるものである。

石室内の原形については、和田氏の復原図では、南北両端の石積壁を現在の高さでその外側の粘土壁を含めた石室内の棚とし、その上に鏡が置かれたと想定するが、梅原博士の復原図では、これを二重の側壁として、有孔大板石を底石の仕口に直立した時の孔の直下まで、つまり現在の長側壁の高さ位までの高さのある石積壁を想定し、石室の両端に副室的なものを想像されているように見える。

石室南・北両外側 南北両端の有孔大板石の外側から主体部墳丘裾矩形石垣に至る間はいずれも相当に破壊されているが、南側では石室の東西両側壁と等間隔で東と西に、割石小口積の両壁が一部残つている。

この割石小口積の東西両壁に挟まれた中間は、有孔大板石の基部には雪白の砂利が敷かれ、この雪白の砂利敷より外方の矩形石垣までの間は、石垣の高さまで清浄な砂が敷かれている。北側でも南側と同様な施設の存在を僅かに察知し得る程度の痕跡を留めているが、白砂利の痕跡は実測図〔図版一〕に認められない。

この部分について、梅原博士の復原図〔図版三の二〕も、和田千吉氏の復原〔図版三の一〕図も共に石室の近くまで人が行つて石室を拝する為の道と解し、地表面に露出したものとしている。しかしこの部分が地下に埋没された施設と見ても実測図〔図版一〕に表された所では支障なさそうである。

4 屋根形石

長さ二・六三六米、幅一・〇三米、高さ〇・四五米の屋根形をし、表面に文様彫刻のある石である。石室直上の「不純粘土ノ封土」上に据えられ表土下に埋つているが、これは前述の絵図によれば、元祿以来明治十二年頃まで出土の位置で、地上に露出していたものである。然し出土位置がこの石の原位置とすることには、この石の据つている不純粘土の封土が前述の様に当初の儘と断定出来ないことと、この石の方向と石室の方向が一致しないこととで、問題がある。原位置に想定し得る位置には、出土位置のほかには、石室天井石直上と石室内とが考えられるが、石室内の場合は石室幅がこの石より六糎広いだけで窮屈ではあるが入らぬことはない。梅原博士の復原図〔図版三の二〕では出土位置を原位置に想定してあるが、諸陵寮や和田千吉氏は出土位置を原位置とは認めなかつたようで、実測図〔図版二〕では封土裾に移転させている。出土位置を原位置にした場合、後に記す埴輪きぬがさの出土との関係に問題がある。石室内にもあつたと仮定すれば石棺の蓋以外に考えられないが、これには石棺の蓋に普通の繩掛突起がなく、石室天井石には繩掛突起が作られているので、簡単に石棺の蓋とすることも無理と思われる。

四、出土遺物

大正五年にこの御陵から発見された遺物のうち、副葬品は全部コンクリート製の箱に納めて埋戻し、埴輪は一部諸陵寮に運んで復原された。

しかし復原した埴輪も関東大震災に遭つて焼失したので、現在実物で見られるものは何も残っていない。従つて次に記す遺物の解説は、先きに挙げた写真・石膏模造・拓本・図面類と、これまでに断片的に発表されたものによる所見である。

鏡

石室内の北部には仿製鏡三面があつたことが当時の記録から知られ、又復旧工事の際に、石室南端の有孔板石と、その内側の石墨壁との中間の粘土中から鏡二面が発見されたことが実測図〔図版一〕によつて知られる。従つて鏡は全部で五面発見されたことになるが、和田氏の復原図〔図版三の1〕には、石室の南と北の端にそれぞれ三面ずつ計六面の鏡が描かれていて、更に一面の鏡が発見されたようにも思われる。しかし裏付けとなるものがないので、これは和田氏の推測に過ぎぬかも知れない。この五面の鏡のうち仿製鏡三面については、既に拓本の写真が種々のものに掲載されており、石膏模造・写真も揃つているので充分その形状を知ることが出来るが、他の二面については、そのうち一面が、近畿日本叢書「大和の古文化」に掲載されたところの石製品と共に撮影された写真があるだけである。材質は梅原博士のお話では富岡先生や内藤先生がいずれも白銅と云われたと云うことである。

1 流雲文縁変形方格規矩四神鏡〔図版五の1〕

直径三五糎、縁厚さ平均〇・八糎、面反り一・四糎、鈕径四・五五糎、鈕高一・一糎。

この鏡の図文は、奈良県大塚新山古墳出土の流雲文縁と波紋縁との二つの仿製方格規矩鏡の図文を組合せたようなものであるが、特色ある点は、前記大塚新山古墳出土波紋縁方格規矩鏡・沖ノ島十七号遺跡出土変形鳥文縁方格規矩鏡に見られる有節蒲鉾状の凸帯を内区と外縁の間に配すること、主文様が同一文様を四つ繰り返したものであることである。しかもその単位文様が、一つの文様を左右に裏返しにして配し、その中間に僅の文様を加えると云う甚だ機械的なものとなつている。しかし鮮明な美事な出来である。

2 唐草文縁変形方格規矩四神鏡〔図版五の2〕

直径三二・五糎、縁厚さ平均〇・六糎、面反り約一・二糎、鈕径三・七糎、鈕高一・四糎。

この鏡が他の同式鏡と異なる点は、内区に多数の乳を配することで、大中小合せて四十八個の乳がある。又内区のL字形文様を外縁にもつけていることも特殊であるが、これは奈良県円照寺四号墳出土鏡及び讚岐大川郡津田町出土鏡に同式の鏡がある。図文は1の鏡の有節蒲鉾状凸帯の代りに、内行花文鏡に見られる斜行線文を繰り返して小乳を着ける違いの外、主文様は著しくくずれて渦文様になつている。しかし主文様が単位文様を四つ繰り返すことと、鮮明な作であることは1と同様である。

3 直弧文縁変形内行文鏡〔図版六の1〕

直径三四・三糧、縁厚さ平均〇・六糧、面反り一・二糧、鈕径四・三五糧、鈕高一・九七糧。

鈕座は内行文鏡に普通の四葉とこうもり形の中間、ペン先形四葉とでも云う様な変つた形を呈している。鈕座と内行文帯との間には、唐草文帯及び擬銘帯の一種と見られる二条の帯を置き、この帯と鈕座、内行文帯の間隙には乳文をおいて一種の唐草文の地で充填し、内行文の外側には重弧文・擬銘・櫛齒文の各帯とを順に配し、内向と外向の半円で八区に分けて、その間に直弧文を配した外縁に終つている。著しく変つた複雑な背文であるが、鮮明に鑄上つている。内行文鏡中では最大の当部所蔵天理市大塚出土鏡に次いで大きいものである。

この鏡は内行文鏡と云う中国の鏡式の内に我が国独自の直弧文を巧みに取り入れており、中国の鏡式に倣い乍らこれに我国独自の文様を組み込んだ点で、紫金山古墳出土の勾玉文神獸鏡と構想が同じであり、狩獵文鏡や佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡や大塚新山古墳出土の直弧文鏡のような全く独自の構想のものより前段階のものと考えられ、年代の上でもこれらより先行するものと思われる⁽¹⁵⁾。

4 平縁式四獸鏡〔図版六の2〕

梅原博士のもとに残つた石製品と並べて撮影された写真が、この形状を知る唯一のものである。図版の写真はこの写真から鏡だけを複写拡大したものである。鏡の直径は写真に列んでうつる車輪石の大きさから

一四から一五糧前後と推定される。唯一の写真が残念なことに全体にピントが合っていないので、形状ははつきりしないが、三角縁のように見える所もある。梅原博士も実物は御存知ないが、富岡謙蔵氏からその実見談を聞かれた由で、書陵部での講演の際に、この鏡について解説された。標記の鏡名もそれによつた。解説の要旨は四獸を半肉彫にした平縁式四獸鏡で、山城久津川車塚古墳出土の仿製鏡がこれと同じ文様である。実物を見られた富岡先生はこの鏡は舶載鏡で六朝頃に行くだろうと云われたので、舶載鏡と認めてよいと思う。舶載鏡とすれば中平の年号のあるものと似ているから後漢代の終り頃のものと考えられると云うものである。

石製品

石製品は当時の記録には四十二点あつたことになつているが、石膏模造のあるものは、車輪石・楕形石各三、石釧・管玉各一、刀子三、斧頭一、高坏二、合子蓋一、白一、椅子形・貝殻形各一、琴柱形二、原形不明の破片二の二十二点である。実物の写真では計二十六点をかぞえるが、これは石膏模造では接合して一点になつているものが何個かの破片になつている為の相違である。石製品の材質については記録がないが、梅原博士によれば碧玉製品とのことで、実物の写真や模造品の膚合から見ても碧玉製として誤りないであろう。

1 車輪石

完形品二個と破片一個の計三個がある。

車輪石A〔図版七の1〕〔第一図1A〕

長径一六・八糎、短径一四・六糎、孔長径六・二糎、孔短径五・九糎、縁厚さ〇・七糎、一・四糎、孔縁厚さ一・八糎一・九糎。

実物の写真では向つて左下が欠失しているが、模造は補足復原して完形品になつている。環体は後者Bに比して孔径の割に幅広く、孔壁の立上りは外側へ彎曲している。裏面は大よそ平坦で、表面は幅広い放射状の波状彫刻を施しており、普通見られるものである。

車輪石B〔図版七の1〕〔第一図1B〕

長径一三・九糎、短径一二・六糎、孔表長径五・六糎、同短径五・四糎、縁厚さ〇・六糎、孔縁厚さ一・一糎、裏面内反り〇・五糎。

環体はやや幅広く、漏斗状に彎曲し、内孔は稍小さく、内孔壁の立上りは僅かに内側に傾斜して且直線に近い。表裏共に波状彫刻を放射状に施し、車輪石としては極めて例の少ないもので、表面は波頭の稜線と波底とに、更に細い溝を刻んでいる。裏面の波状彫刻は、稜線が表面の波底の溝と一致するように彫刻が施され、その稜線には表面と同様に更に溝を刻むが、表面の波頭稜線と重なる部分には溝を欠く。従つて側面から見ると、環体の周縁は波状をなしている。このような両面彫刻のある車輪石は、当部所蔵の奈良県東山古墳出土品に一例あるが、環体に漏斗状彎曲がないのでこれより年代は下ると考えられる。

車輪石C〔図版七の1〕〔第一図1C〕

長さ八・三糎、幅六・五糎、縁厚さ〇・八糎一糎、孔縁厚さ一・四糎

前記Aと同形式のものの破片であるが、放射状の波状彫刻の間隔はAより稍狭い。波状のくりは深く、孔壁の立上りは内側に傾斜する直線でBの形に近い。

2 鋏形石

完形品二個と破片一個の各形状の異なる次の三個がある。

鋏形石A〔図版七の1〕〔第一図2A〕

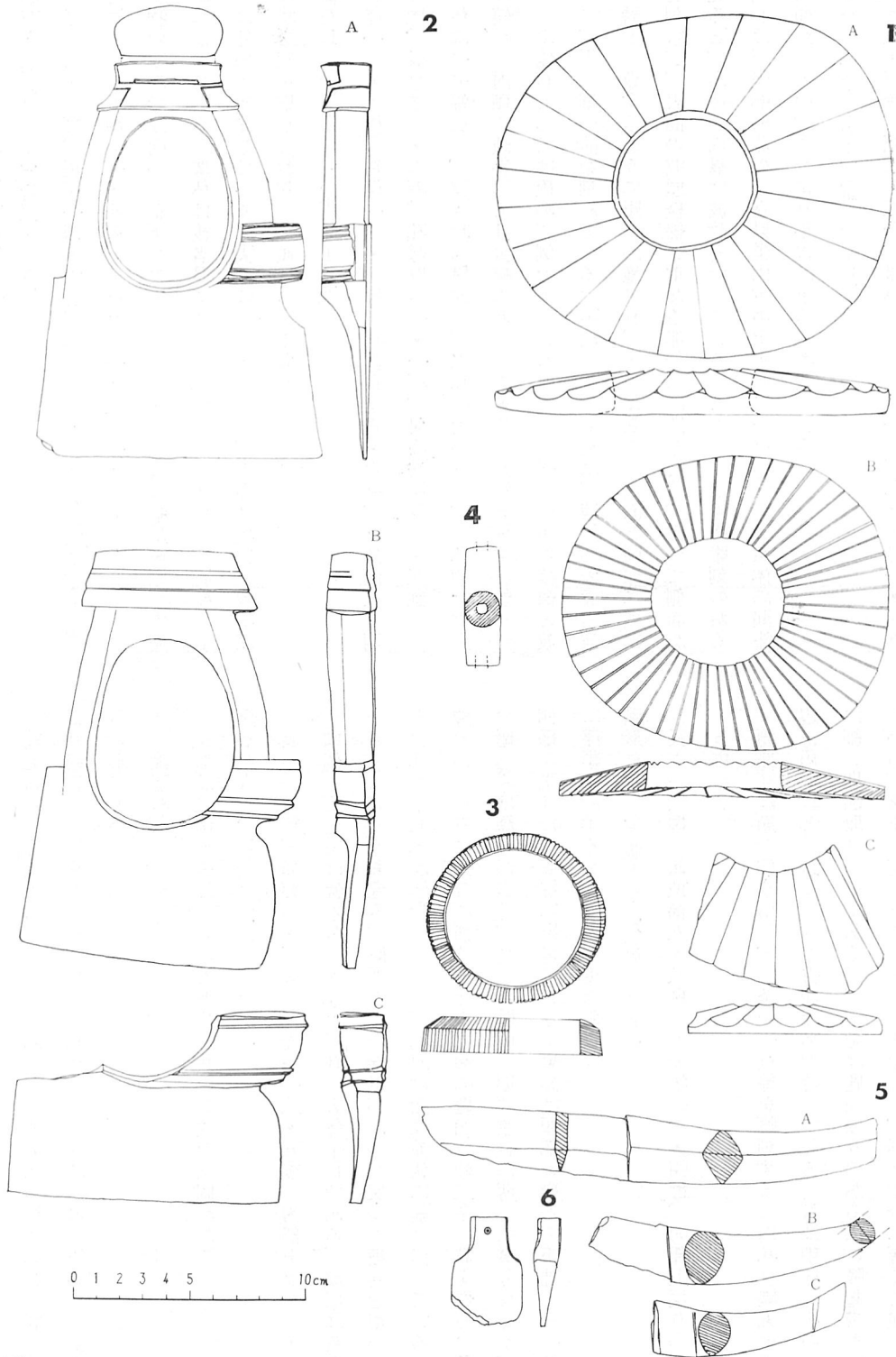
長さ一七糎、頭幅四・四糎、刃先幅一二・五糎、刃部上反り〇・三糎、頭部と刃先とは幅の差が大きく、且つ大体平行である。頭部は割合に小さくて強くうち窪み、直弧文状の線刻があつて変つた趣向を用いている。孔の平面形は卵形に近いが、孔内壁面は弧状に張り出している。右腰のふくらみは割合に強く、その両端に匙面取の二条の溝を作る。腰下の彫込みは深いが広く、従つて弱い。裾は割合に薄くて幾分反るが、右側縁の張はなく直線に出来ている。裏面は頭部と腰から下部とを一耗程に浮彫りにするが無文で平滑である。

鋏形石B〔図版七の1〕〔第一図2B〕

長さ一八糎、頭頂幅五・八糎、刃先幅一〇・四糎、刃部上反り〇・七糎。

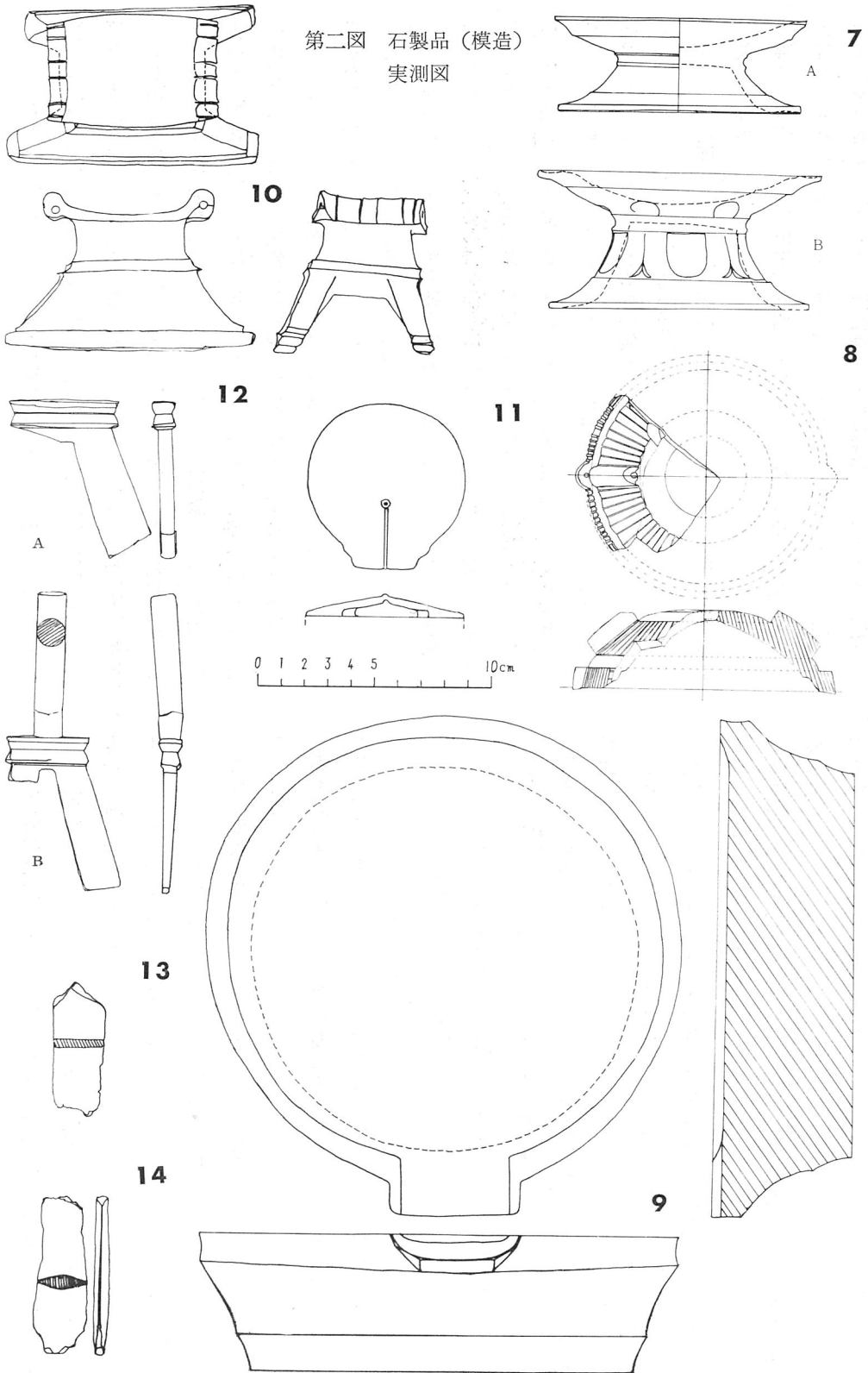
頭部には節を作り出し、二条の平行線を陰刻する。内孔は隅丸の不等辺三角形状とも云うような古様な形を持つている。腰は稍厚くその上縁は細い匙面取りのみであるが、下縁は匙面取りのある広い隆起帯をなしている。腰下の切り込みは浅く丸味をもち、裾は割合に薄くて強く反つ

第一図 石製品（模造）実測図



1. 車輪石 2. 鍬形石 3. 石釧 4. 管玉 5. 刀子 6. 斧

第二図 石製品（模造）
実測図



7. 高杯 8. 合子蓋 9. 臼 10. 椅子 11. 貝殻形 12. 琴柱形 13.14. 不明石製品
(51)

ており、右側縁の張りも比較的強く弧状を呈して古い形をもっている。裏面は頭部中央に幅五耗の浅い縦溝をつける他は、全般に線に近い浅い彫りで表面と同様の構図に浮彫りにしている。前者Aとの形態上の相違は、頭頂と刃先が平行でないこと、刃先及び刃の右側が弧状をなすこと、長さに比して刃幅が狭いことなどである。同形態のものは伊賀石山古墳・大阪紫金山古墳・岐阜親ヶ谷古墳などの出土品中に見られる。紫金山古墳出土の貝輪と比較した場合、頭頂と刃先が平行でない点でこれがよく似ており、頭部が小さい点は前者Aがよく似ている。

鍔形石C [図版七の1] [第一図2C]

刃先幅一一・六糎、刃部上反り一糎。

下半分の刃先部と腰を残す破片である。腰は張り強く、上下には匙面取りの溝をつけた二条の帯を作り出している。刃は長さが著しく短くて強い反りがあり、右側の縁は弧状を呈しているが前者B程には曲らない。腰の節と刃部の接続具合はBと同形式であるが、刃の反りはBより大きく、刃幅はBより広いのに刃の高さはBより短くなっている。原形はBよりも大型と察せられる作の優れたものである。

3 石 釧 [図版七の1] [第一図3]

外径七・八糎と七・三五糎、内径五・八糎、高さ一・五糎、外側上半部斜面高さ〇・五糎。

環体は若干いびつに出来、外側上半斜面は傾斜が稍強い。外側は細かい均等な放射状の刻みで全面を飾り、その上半の斜面と下半斜面の続く稜線には細い溝をつけている。内孔壁は平坦な環底よりやや内側に傾斜し

て殆んど直線に立ち上つており、そのため内孔径は下方が上方より約〇・二糎程広くなっている。環体の高さが幅の一・五〜二倍の大きさをもつ普通の形のものである。

4 管 玉 [図版七の1] [第一図4]

長さ五・一五糎、径一・五糎、孔径〇・五糎。
管体の中央部に稍ふくらみをもつものである。

5 石製刀子

弥生式遺跡より出土する鹿角製把手に刀身を差し込んだ刀子の石製模造品で、普通古墳から出土する石製刀子は鞘に入った形をうつしたものであるが、これは抜身の刀子をうつしたものの三個である。

刀子A [図版七の2] [第一図5A]

柄長一〇・七糎、柄頭幅一・九糎、柄縁幅二・八糎、頭厚さ一・三糎、縁厚一・七糎、刃渡九糎、関幅二・六糎、刃厚〇・八糎。

破片三片を接合して模型をとっている。柄は側面に稜線があつて菱形断面をなしている。

刀子B [図版七の2] [第一図5B]

柄長八・八糎、幅柄頭一・一糎、同柄縁部二・四糎、厚さ柄頭〇・九糎、同柄縁部一・八糎。

刀身の半が折損して欠けている。柄は下面を稜線に作り、断面は杏葉形を呈している。

刀子C [図版七の2] [第一図5C]

柄長八・二種、柄頭幅一・五種、柄縁幅二・四種。

刀身は柄との境いで折れて全く欠失している。柄は両端をたがを掛けたように太く作り出したもので、もとの形を忠実に伝え残したものと云えよう。これは当部所蔵の奈良県新山古墳出土品に近い形をしているが、新山のもは刀身を別に差し込むようになった柄だけである。

6 石製斧〔図版七の2〕〔第一図6〕

長さ四・六五種、袋部幅一・六種、袋部厚さ〇・九種、刃幅三・一種、孔径〇・三五種。

袋部は細い板状をなし、関から先は広い刃をつけるが、刃先はなかば欠け損じている。比較的扁平な石製斧である。大塚新山古墳出土の滑石製斧と大きさが似ているが、袋部が円柱状を呈する点が異なる。

7 石製高坏

脚部に透彫を施したものと、無文脚のものが各一個ずつある。破片を接合した完形品として模造されている。

透彫脚高坏〔図版八の1〕〔第二図7B〕

口径一二・二種、底径一一・二種、高さ六種、坏部深さ一・四種、坏脚接続部径五・六種。

坏部と脚部とに割れた破片を模造の際接合復原したものである。坏部内面は二個の同心円を浮出させ、縁と同心円の間を匙面取りにする。背面は節をつけて上下二区に分け、下方区の下端より受花状に約一種の大きさの半円形五個を陰刻する。脚部は裾の折返しを含めて上中下三区の

段違に分け、上区は匙面取りとし、中区は縦に五等分して五弁の返り花を陽刻し、各弁中央を舌状に彫り抜いている。類例を見ぬ優品である。

無文脚高坏〔図版八の1〕〔第二図7A〕

口径一〇・八五種、底径一〇・五種、高さ四・一種、坏部深さ一・三五種、坏脚接続部くびれ径五・四種。

これは前記高坏から花卉状彫刻を除去した面の段違による同心円装飾だけのもので、同心円の構成は殆んど前者と同じである。

石製高坏の出土例としては、当御陵後円部西北方陪塚附近出土碧玉製のものについて、「古代学研究第十号」に小島俊次氏の報告があるが、坏部が深く脚部内刳の少ないもので、当陵のものとは異なつた形のものである。外見上では岡山県鶴山丸山古墳出土滑石製器台の方が似ているが、これも断面形が異なっている。

8 石製合子蓋残欠〔図版七の2〕〔第二図8〕

推定直径一〇・三種、同高さ三・四種。

全体の四分の一程度の破片で、模造は二片を接合したように見受けられる。蓋の裾は極めて整つた歯車状彫刻と二段の匙面取りとを交えた帯状彫刻を施し、それに紐掛けの半管状の有孔突起を作り出している。頂部は球面状を呈し一条の刻線を円形にめぐらすだけである。頂部と裾の間の球面状の斜面には前述の車輪石Bの表面と同形の刻文を浮彫りし、裾の紐掛に対応する部分には、管玉をはり着けたような紐掛け管を彫り出している。蓋と身の接合部は幅〇・三種、深さ〇・七種に彫込んで印

籠式になつている。奈良県佐味田宝塚古墳、岐阜県常盤村等の出土品に形がよく似たものがあるが、いずれもこれより小形である。

9 石製臼〔図版八の2〕〔第二図9〕

口径二〇・四糎、底径一六・四糎、高さ五・八糎

上部に平坦な浅い窪みをつけた円形の摺り臼で、一端に片口をつくり出している。外側は三段の匙面取りにし、中・下段は外広がりに傾斜をしている。このような片口のある臼は京都府長法寺南原古墳、同大原野村鏡山古墳から出土している。

10 椅子形石製品〔図版八の3〕〔第一図10〕

高さ七糎、上部縦四・九糎、同横七・四糎、下部縦六・九糎、横一〇・八糎。

前後の縁が舟底形に張出し、左右両端が稍上方に反つた板状の坐席部に、梯形の脚を二枚外開きに前後に着けたもので、坐席部の左右両端は竹根状の陽刻が施してある。梅原博士の「椅子の石製模造品」(大和文化研究 第三三)には、この石膏模造の写真を掲載し、奈良県大塚新山古墳出土の筆架状石製品や、京都府神明山古墳及び奈良県桜井市メスリ塚出土のU字形彎曲板に梯形外開き脚をつけたものを同種の椅子模造品とされている。この大塚新山古墳出土品以下の三点は、上部坐席部の両端を竹根様彫刻で飾り、且つ梯形脚を外開きに着ける点ではこれと共通である。然し新山古墳出土品のは、坐席部の縦横比がこの御陵のものとは逆であつて、且つ上部両端の上反りが著しく、機能にも差異があるようにも見

られる。メスリ塚・神明山のものも、坐席部両端が極端に反り上つていて、脇掛としてはやや高すぎ実用的でない。従つてこれらの中では椅子として実用的な形をする当陵のものが最も古いと考えられる。

11 貝殻形石製品〔図版七の2〕〔第一図11〕

長径七・一糎、短径六・八糎、厚さ中央部一糎、縁〇・二糎、突出部厚さ約〇・四糎、孔径〇・四糎。

円形の一部を突出させて貝殻形に作つた板状のもので、中央近くに円孔をあけ、円孔より突出部中央に向つて一条のひだを浮彫りにしている。貝殻形石製品には静岡県三池平古墳出土の帆立貝形のものがある。

12 琴柱形石製品〔図版七の2〕〔第一図12〕

円柱の下に側面を葉研彫にした横棧をつけ、更にその下に板状の細長い脚を二つ外開きにつけただけの至極簡素な形のものである。同形式のものが大小二個あるが、いずれも欠損がある。他に同形のもの出土例はないが、強いて近似のものを求めれば静岡県松林山古墳及び三重県石山古墳出土のものである。前者は円柱中央部に棧とくびれを加え、円柱下にも更に横棧を加えたものであり、後者は円柱を極度に長くし脚には中途に節をつけたものであつて、何れも当陵のものより装飾の多いものである。

琴柱形A〔図版七の2〕〔第一図12B〕

長さ 脚五・四糎、棧一・二糎、円柱六・一糎。幅 脚一・六糎、棧三・六糎。厚さ 脚〇・六糎、棧一・一糎。

円柱径一・二糎。

片脚を欠き、円柱は途中に割れひび状のものがあつて、そこで僅かに彎曲している。実物の写真ではそこで折れているようにも見える。脚は折損したものを接合している。

琴柱形B〔図版七の2〕〔第二図12A〕

長さ 脚部五・六糎、棧一・二糎。幅、脚部約二糎、棧四・七糎。

厚さ 脚〇・七糎、棧一・一五糎。

円柱部及び片脚を欠くが、Aより大形のものである。

13 原形不明石製品A〔図版七の2〕〔第二図13〕

長さ六・八糎、幅二・三糎、厚さ〇・六糎。

横断面が扁平な菱形をする薄片である。表裏共中央に鑄が認められ、側面は四方破砕面であるが、両長辺の一端には劍の関と茎の境を思わせる弧状の原側面が一部残っている。鑄のある点から見て、奈良県大塚新山出土の碧玉製鏃若しくは同県宝塚出土の滑石製劍身のようなものの破片と察せられる。

14 原形不明石製品B〔図版七の2〕〔第二図14〕

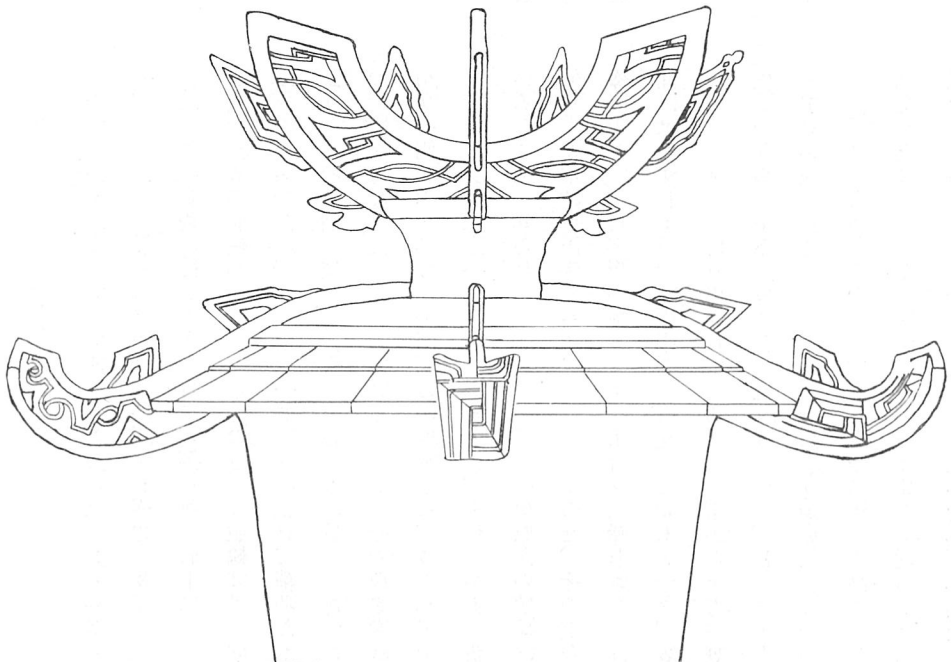
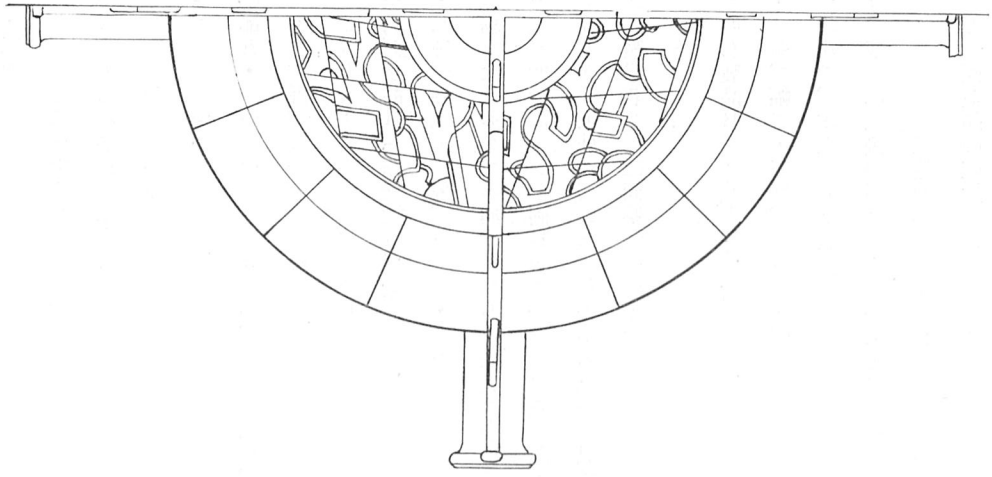
長さ五・八糎、幅二・三糎、厚さ〇・四糎。

細長い板状片で、本来の面は表裏両面及び長辺一辺である。他に長辺破砕面の端の部分に二箇の円孔内面の一部と見られる本来の小曲面が二箇所残っている。この二箇の小孔と見られる痕跡の残存位置と形状より推して輸入刀子模造品の破片のようにも考えられるが断定は難しい。

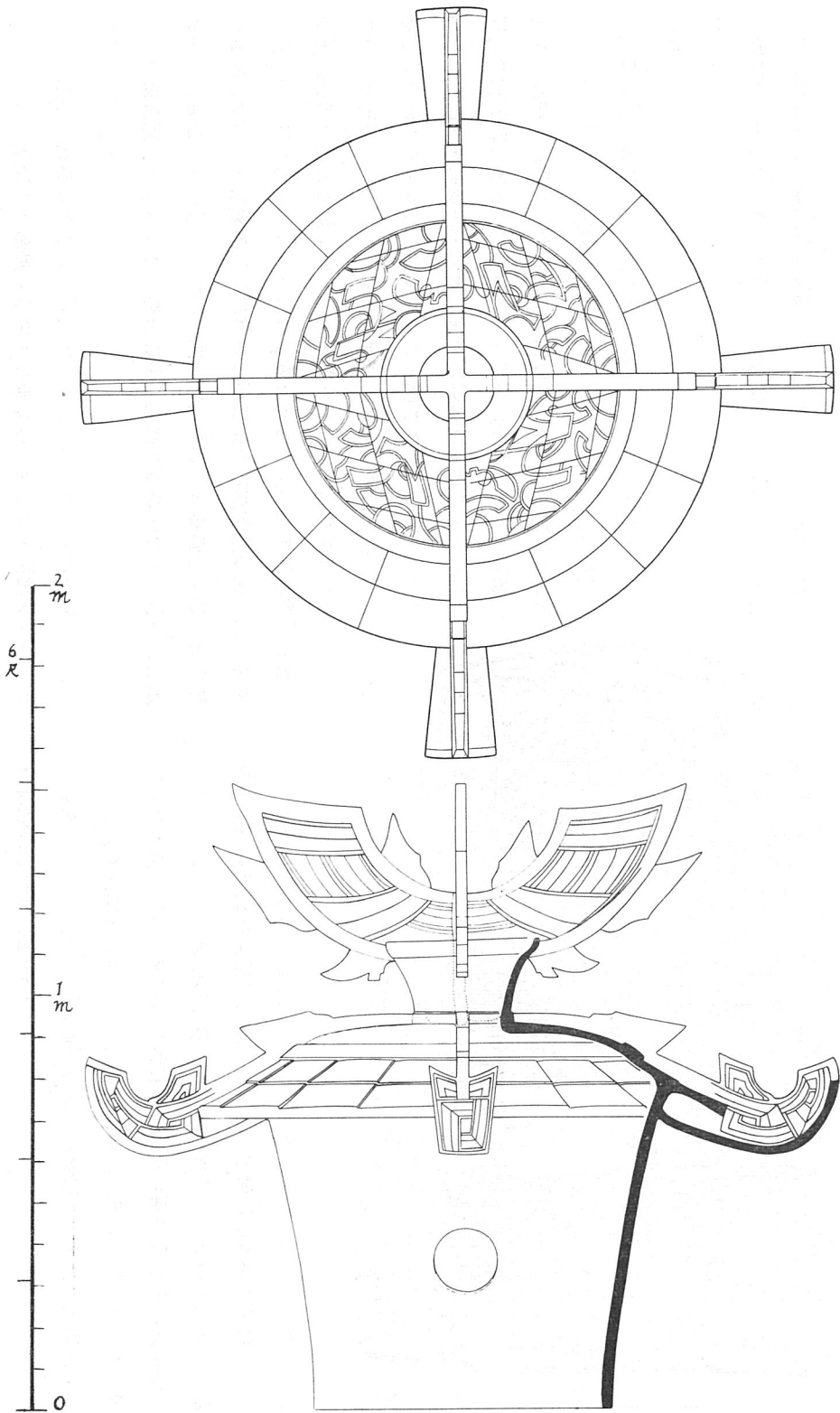
埴輪

1 きぬがさ〔第三図・第四図〕

当時の諸陵頭山口鋭之助博士の論文「御大葬と神祭との類似の例証 一、二をあげて最近の祭祀制度に関する感想に及ぶ」(歴史地理(四十)によれば、この御陵の復旧工事の時に、「御在所の直上に七、八個の直径六、七尺の衣笠の埴輪があつた。是等の巨大な埴輪は悉く同形で何れも精巧なものであつたが、その中の一個は殊に勝れて精巧なものであつた」と云う。この埴輪は破片を接合して諸陵寮に置いてあつたが、関東大震災の折になくなつたと云われている。しかしその復原図は山口博士の前記論文に側面図と半分の平面図とが掲載され、後に和田千吉氏の全形の復原絵図が「考古学」一卷四号に掲載され、それらが更に諸書に転載されているので広く知られている。この二つの復原図の埴輪は殆んど同形で、何れも植木鉢形円筒の台に伏坏形の笠をのせ、その笠の頂上の坏の香台様円筒上に、U字形の板を十字に組合せた鱗形飾をつけている。笠の上面にはいずれもその頂の中心で直交する肋木がつき、笠中央部には円形にめぐる突帯が作り出されている。この帯から下方の笠の縁との間は何枚かの薄板で上下二段に葺いたように作り、帯より上方の部分には直弧文の線刻が施されている。しかし細部には相異があり、山口博士の図〔第三図〕は和田氏の図〔第四図〕より直径に比して高さが低く、頂部鱗飾の刻文も前者は直弧文を施すが、後者は弧文を縦横交互に組合せている。又突帯に囲まれた部分の直弧文も文様がそれぞれ異なり、前者の直弧文



第三図 埴輪きぬがさ復原図（山口博士論文所収）



第四図 埴輪きぬがさ復原図 (和田千吉氏調査)

については、異なつた埴輪片の拓本を継合せて作つたと註記されているので、当陵の埴輪きぬがさには、部分的に小異のある同形埴輪が七八個あつた訳である。

この復原図に表わされた埴輪の形態は、他の埴輪きぬがさにくらべ最もよく原きぬがさを写していると思われ、きぬがさ埴輪では最も古い形と考えられる。当書陵部には応神天皇陵出土の比較的完全形に近い埴輪きぬがさがある。それは大きさは当陵のものに近く、形は当陵のものから頂部鱗飾と肋木を取り去つて、笠中央の突帯と縁の間の薄板

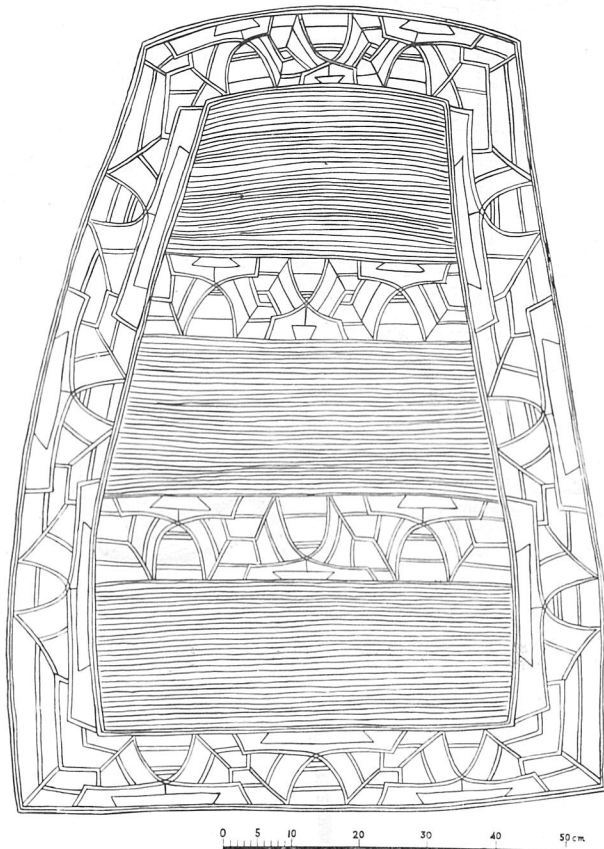
茸きを平滑にし、そこに横線と放射状の複線の刻文を施した当陵のものよりかなり年代の下降すると思われる形のものである。この応神天皇陵出土埴輪と当陵の埴輪の中間様式のものには、頂部鱗飾はあるが、笠部の形は応神天皇陵のものと同形をするか退化した肋木の存する岡山県金蔵山古墳、奈良県室大墓などのものがある。書陵部蔵品にはほかに三重県石山古墳、景行天皇陵出土埴輪中にも当陵のものによく似た頂部鱗飾の破片がある。

2 楯

前記山口博士の「歴史地理」四十六卷所収論文によると、「御在所の上に」数個の埴輪楯があつたと云うが、現在形状のわかるものは次の二つで、いずれも埴輪楯としては実用的な形をして居り、この種埴輪としては最も古いものと認められる。

実物写真のもの〔図版九〕

楯部高さ一〇八釐、上部幅五四釐、下部幅七六・五釐、最大幅八〇釐。実物は現在見当らないので、関東大震災の折にきぬがさと共に焼失したものである。然しこの埴輪は東京国立博物館に現寸大模造¹⁶⁾が所蔵されている。この模造は全体に黄土色に着色してあるが、破片の接合状態まで実物写真と同様に模造してある。楯部は蒲鉾状に彎曲し、厚さ約一釐の板状を呈する幅一三・一三・五釐の縁枠と幅一一・五〜一二釐の



第五図 埴輪楯復原図

押縁があつて、それに直弧文の線刻のある置楯の埴輪である。寸法は模造によつた。

和田氏復原図のもの〔第五図〕

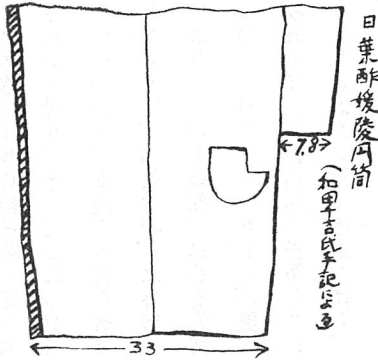
高さ一一八糎、上幅五四・五糎、下幅八五・五糎、最大部幅八七糎

実物写真のものより大型の同型式の埴輪である。縁枠と押縁の間に密な横線刻を施すほか、縁の直弧文にも相違がある。

3 家

前記山口博士の論文には御在所の上に精巧を極めた家形埴輪があつたことを記しているが、実測図や写真もなく、和田千吉氏の墳丘復原図〔図版三の一〕からそれが四注造埴輪家であつたことを推測されるのみである。

4 鱗付円筒



第六図 鱗付円筒

太田陸郎氏の論文「有鱗埴輪円筒」(考古学二(卷四号))に和田千吉氏手記による

実測図〔第六図〕が掲載されている。これは底径三三糎の上部を欠失した円筒の上方に幅七、八糎の鱗が付き胴に千鳥形孔のあるものである。岡山県金蔵山古墳では鱗付円筒に蓋形がさし込んであつたと云われるので、これも同様であつたかも知れない。当陵では現存埴輪列中に同形のものを未だ確認していないが、景行天皇陵や神戸市垂水五色塚古墳の埴輪列中には多数の鱗付円筒が混在している。

5 蓋付壺

和田千吉氏の復原図〔図版三の一〕の側面図の墳丘中腹にある内側埴輪円筒列中に一個描かれている。円筒の上部が壺の口状に細くなつたものの上につまみのある蓋が載っている。復原図なので想像の加わっている可能性もあるが、現場を見て居られた人のものであるから一応根拠あるものとしてよいであらう。

刀及び壺たがね

「狭木之寺間陵御所在復旧工事実測図」〔図版一〕の平面図の、墳丘の北北東裾の部分に、「此所ヨリ刀一口壺二丁頭出ス」と記されているのでその出土は知られるが、他に資料がないので副葬品かどうかは不明である。

五、結 び

以上記した日葉酢媛命御陵に関する書陵部蒐集資料の解説によつて、

大正五、六年の復旧工事の際その一部が判明した当陵の遺構・遺物の概要は理解されると思う。そこでこれら遺構・遺物から推測される当陵築造の相對年代について、前述の所見を取りまとめ結びとする。

先に記したように、当陵の墳丘は外形・占地の上で所謂古式古墳の通性を備えており、その主体部の構造も亦特殊ではあるが古式古墳に共通な竪穴式石室の一種である。然しこの竪穴式石室は、図面によれば他の古墳では墳丘の頂上を掘込んで構築しているのに、当墳は墳丘上に構築して盛土をしたと云う異例の構造を持ち、且つ類例のない特殊な形態を取るが、竪穴式石室としては最も整つたものである。しかも石室の底に板石を敷く狭長な石室と云う点で、安土瓢箪山・椿井大塚山・桜井茶臼山・長法寺南原古墳などの古式古墳で古いとされる古墳と共通点をもつ半面、石室の天井石には室大墓や岡山県丸山古墳の石室天井石に見られるような、長持形石棺の蓋と同様な繩掛突起の作り出しのあるものを横に並べ、又石室の前後には、大阪府松岳山古墳の所謂碑石に類似した大板石を立てて側壁とするなど、年代の下降するとされる古式古墳と共通点を持つている。この石室の各部に精巧な加工石を用いることは、有力者の墳墓として入念な仕事がなされていると云うだけではなく、大板石側壁や切板石の底石と、その仕口の様相及び天井石の加工状態の上に石棺に通じる所が認められる。これに墳頂出土の屋根形石を組合せて考えると、この石室は竪穴式石室から石棺に移行する過渡的な姿とも見られ、時期的には石棺の発生する直前のものとも考えられる。

又石室を囲む石積は、桜井茶臼山・岡山県金藏山・室大墓・大阪府黒姫山の諸墳の墳頂部にある石敷と殆んど同じ矩形区割ではあるが、当陵の石積の矩形区割は、石室の基底面と殆んど同じレベルに設置された石垣であつて、石室の封土の裾を囲み封土の基壇側面又は護石の役をしているのに対し、これ等諸墳のものは石室の封土上部に設けられていて、石室の区域を区割するだけの形式的な石敷と化している。このことは当陵の石積矩形区割がこれら諸墳の石敷の矩形区割に年代上先行することを思わせる。

副葬品の上では、当陵の仿製鏡はいずれも直径三〇糎を超える大形のしかも作のすぐれたものであつて、その背文は、中国の鏡式を倣い乍ら、それに我が国独特の文様を盛り込むと云う特徴を持ち、それが特に内行花文鏡において著しい。この特徴は、紫金山古墳の勾玉文神獸鏡とも共通する所であつて、このような式の鏡は、その文様の変化過程の上では、佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡や、奈良県新山古墳出土の直弧文鏡などの我が国独自の背文の鏡式に先行すると思われるので、年代の上でもこれら鏡に先行するものと考えられる。

石製品については、発見されたものはすべて碧玉製で古い様相を示しており椅子形石製品は、奈良県新山・同メスリ塚・京都府神明山などの諸墳出土のものは、坐席部が極端に上反りして椅子の実用性を失いかけているのに対し、当陵のものは上反りの少ない実用的な形を保っており、前記諸墳のものより椅子の模造品としては年代が古いと見られる。又車

輪石・鍬形石では古様とされる形のものを含み、石製合子では佐味田宝塚古墳のものに最も近似している。石製刀子は奈良県新山古墳、石製臼は京都府長法寺南原古墳、貝殻形石製品は静岡県三池平古墳、琴柱形石製品は静岡県松林山古墳、三重県石山古墳にそれぞれ形の似たものがあつて、石製品の上ではこれら諸墳と同時期か稍さかのぼるものと考えられ、仿製鏡から推される古墳の相対年代と大差はない。

埴輪について見ると、当陵の埴輪きぬがさのように、蓋の頂上鑄飾や、蓋を支える四本の肋木を作り出し、蓋の下縁上下二段の薄板葺きを表現した至極写実的なものは、埴輪きぬがさとして最も古い形のものと考えられ、応神天皇陵出土の埴輪きぬがさのような、頂上鑄飾や蓋を支える肋木を省略し、蓋下縁の二段薄板葺き部分もこれとかけはなれた裝飾文とした蓋形だけの簡略化したものよりは、年代の上でも可成りさかのぼるものと思われ⁽¹⁷⁾。又景行天皇陵より出土の埴輪の中には、きぬがさ頂部鑄飾の破片や、多くの当陵と同様な鑄付円筒が認められるので、限られた埴輪資料の上では、同陵と同時期乃至は稍さかのぼる時期とみてよ⁽¹⁸⁾と思う。

これは主体部の構造や副葬品の上から推し測られるものと矛盾はないものと考えられる。

註

- (1) 日本書紀卷第六、垂仁天皇卅二年七月己卯の条。
- (2) 新撰姓氏録左京神別下。「石作連、火明命六世孫、建真利根命之後也。垂仁天皇御世、奉為皇后日葉酢媛命作石棺献之。乃賜姓石作大連公也。」

- (3) 菅原陳経撰。群書類従一輯卷二〇神祇部所収。
- (4) 斎藤忠「日本古墳の研究」、小島俊次「古墳時代中期初頭前後の古墳」近畿古文化論攷、甘粕健「前方後円墳の研究」東洋文化研究所紀要第三十七冊。
- (5) 奈良奉行所の記録を集録した「山陵調書之件」(書陵部陵墓課蔵)所収。
- (6) 書陵部陵墓課蔵。明治七十八年の教部省の陵墓の調査書を集めたもの。徳富蘇峰蔵本にも同一のものがある。
- (7) 山口鋭之助「御大葬と神祭との類似の例証一二をあげて最近の祭祀制度に関する感想に及ぶ」歴史地理四十六卷五号。
- (8) 西谷真次・鎌木義昌「金蔵山古墳」倉敷考古館研究報告一。
- (9) 秋山日出雄・網干善教「室大墓」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告一八。
- (10) 末永雅雄・森浩一「河内黒姫山古墳の研究」大阪府文化財調査報告書一。
- (11) 中村春寿・上田宏範「桜井茶臼山古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告一九。
- (12) 藤井貞幹の「好古日録」に松岳山古墓碑として紹介されている。
- (13) 小林行雄「河内松岳山古墳の調査」大阪府文化財調査報告書五。
- (14) 図版三の1和田氏復原図による。図版一の図には清浄な砂とは別個のものに表示されているが「雪白の砂利」の註記がされていない。享保御陵絵図の註記に「平地形之内ニ白き海石之小石多く有之」とあるので、北側の白砂利は早くに散乱させられたことが察せられる。
- (15) 仿製鏡の年代観について、まず三角縁神獸鏡を摸したものが作られ、次いで他の鏡式の当陵の鏡の様な中国の鏡式に倣いながら我国独自の文様を加えたものが作られ、更にその次に全く独自の直弧文鏡の様な鏡が作られたとする説が最近一般化しつつある。この考えは鑄造技術の劣った地域については当然のことであるが、我国の様に前代に銅鐸の様な優れたものを作っている地域に於いては、そこに鑄造技術上の何等かの断層を考慮しなければ成り立たない。これはやはり前代の技術を引継いだ人々により旧来

の説の如く最初に当陵の様な鏡が作られた次に全く独自の文様の鏡が作られたと解した方がよい様に思われる。

それは大形仿製鏡は全般的に彫りが浅く銅鐸の彫りと技術的に共通性が認められ、文様の上でも銅鐸の渦文や流水文の流れを受けると思われる渦文的な文様が多く取り入れられている。又家屋文鏡の家や狩猟文鏡の人像・流水文にも銅鐸のそれとの類似性が認められる。従つて当陵の様な作のよい仿製鏡は古墳時代の初期に前代の技術を継承する工芸家により作られたものと考えられる。仿製三角縁神獸鏡の方はこの時代に新しく興つた勢力に伴なわれた芸術的でない別系統の工人により前者と同時に生産されたのではなからうか。

(16) 註(7)論文に殆ど実物大と記されている。この模造の写真は講談社発行「日本原始美術6」に掲載されている。

(17) 応神天皇陵出土の埴輪きぬがさの蓋部外周の文様は、当陵の埴輪きぬがさの蓋部外周の薄板二段葺の平面形、即ち第三図、第四図の平面図に見られるような円弧と放射線による格子形を基本形としてこれより導き出された図形と考えられる。それは基本図形の放射線を、円弧を境にして左右に喰ひ合わせた岡山県金蔵山古墳中央区割出土の埴輪きぬがさの図文の、単線の放射線を複線又は三重線にしてより装飾的にしたものである。このような基本図形の変形は、基本図形はきぬがさの形状の描写であると云うことが忘れられて、基本図形を単なる装飾文としてしか理解されなくなつて初めて行われると思われるので、基本図形の変形が行われるまでに多くの年月の経過が必要と考えられる。それ故当陵の埴輪きぬがさは、応神天皇陵出土の埴輪きぬがさよりは年代の上で、可成さかのぼると見てよいと思う。